**石郷岡　英子 （いしごうおか・ひでこ）**

**１、プロフィール**

大正期の短歌の代表的な雑誌「黎明」で活躍し、市田と代、晁礼子とともに、「黎明」の中の女流三歌人といわれる。「黎明」後、「座標」にも意欲的に出詠している。

＜生没＞

1901（明治34）年３月３日～1947（昭和22）年４月５日

＜青森との関わり＞

上北郡浦野舘村（現上北町）生まれ、上京して裁縫関係の職に就くが、終戦後弘前市へ疎開、同地で没する。

**２、作家解説**

明治34年３月、父の勤務する上北郡浦野舘村の沼崎駅社宅で生まれる。野辺地中学校、弘前高等女学校を卒業し、青森市に住む。女学校時代から始めた短歌を、当時県下の指導的な位置にあった同人誌「黎明」に数多く発表（大正10年～昭和４年）する。

その間、大正14年に青森市で結婚、15年に協議離婚、昭和３年には東京文化裁縫女子校に在学し、昭和６年には洋服裁縫所を設置していたと各雑誌の消息欄に記載がある。

「黎明」創刊５年目の大正13年１月から６月にかけて、本格的な歌評ともいえる南蘭子の『妄言数章』が５回連載され、９人の歌人中の１人として取り上げられる。南蘭子は、「整わなくともその心を見せた歌」を望むのであるが、石郷岡の歌にはそれがあり、特に『病床から』（大正13年）が推賞できるとした。また、歌作に対する熱心さに敬意を表している。「黎明」の中の女流三歌人の一人とされる。

昭和５年１月に、県下の文芸誌を統合した「座標」が創刊されるが、石郷岡は「黎明」に引き続いて作品を発表する。

戦中は府下吉祥寺に住み、洋裁研究所の門下生を「地上」に出詠させるなどの活動も行い、終戦後、弘前市の叔父宅に疎開する。逝去する昭和22年までのわずかな間ではあるが、津軽地方の歌人たちとの接触も持った。22年４月、弘前市で逝去。享年47。